Bericht des Deutschen Hauses in Naruto

Ruhe（ルーエ　やすらぎ）

Juli　2006

15

The German House in Naruto

鳴門市ドイツ館館報　第15号

発行日　２００６年７月３１日
発　行　鳴門市ドイツ館
編　集　館長　田　村　一　郎
〒779−0225
鳴門市大麻町桧字東山田５５−２
TEL：088 689 0099 FAX：088 689 0909
URL：http://www.city.naruto.lg.jp/germanhouse/
e-mail：doitukan@city.naruto.lg.jp

「道の駅　第九の里」オープン

去る７月８日（土）、ドイツ館と賀川豊彦記念館の駐車場を中心に「道の駅　第九の里」がオープンしました。これまで「道の駅」は全国に800ヵ所ほど作られ、四国圏内にも71ヶ所、徳島県内に12ヶ所ありますが、鳴門市内は初めてです。県が両館前の駐車場を整備し、ドイツ館側にトイレを設置しました。市は物産館を建て、トイレ横に道路・観光情報の端末機を設けました。これまでこの地域には公衆トイレがありませんでしたが、ドイツ風のしゃれた建物が目を引きます。

南側の「物産館」は、一昨年国の「有形文化財」に登録された旧「バラッケ」の一つを移築・復原したものです。「バラッケ」とは、もちろん板東俘虜収容所のドイツ兵下士官・兵卒用の兵舎のことで、1917年４月から２年10ヶ月ほど使われました。全部で８棟あり、その１号棟東半分が『第九』の初演などに使われた「講堂」でした。

ドイツ兵帰国後は、徳島の連隊や学生の射撃演習のための宿舎として利用されてきました。その間西側の４棟は失われましたが、東側の４棟は第２次大戦後まで残り、海外からの引揚者などの寮「新生荘」として利用されました。

建物は1967年現在の県営住宅建築の際に解体され、近くの農家などに畜舎や倉庫として引き取られました。もともとは１棟長さ72.9メートル、幅7.5メートルありましたが、適当に切られて分譲されたらしく、「物産館」は長さ27メートルほどです。

「物産館」前でのお祝いの「獅子舞」

現在でも利用されているのは天井の「洋式トラス」部分だけで、柱や壁には県産の杉や間伐材が使われています。「文化財」を活用した珍しい例として注目されていますが、その意義については中野真弘さんとともに設計・監督にご協力くださった、「古建築等建造物調査研究会」の森兼三郎さんに寄稿をお願いしました。この会は、箸蔵寺を調査・研究し「重要文化財指定」を実現するなど、ことに県内の文化財発掘・保存に努めておられるグループです。

「交通島」とは

「道の駅　第九の里」のドイツ館側駐車場に、２本のレーンが走っています。「あれ何？」とか「駐車場が狭いのに、どうしてあんなものを作ったの？」と聞かれます。名前は「交通島」というのだそうで、東側のレーンの上の小屋は市営バスの停留所です。ここからはっきりしますように、バスの乗り降りをしやすくするのが第１の目的です。もう一つは「道の駅」は24時間開放ですので、なるべく近くに住む人の迷惑にならないようにしなければなりません。一部の愛好者の遊び場にならないようにしたいというのが、第２の設置理由です。皆様の、ご理解とご協力をお願いします。

「道の駅　第九の里」・「物産館」の移築・復原に携わって

古建築等建造物調査研究会　森兼　三郎

大麻町桧の板東俘虜収容所から俘虜たちが去って86年。彼らが暮らしたバラッケ（兵舎）は、第２次世界大戦後外地からの引揚者住宅に使用された。

昭和42年の解体にあたり地元の建設業者が払い受け、近隣の農家が牧舎や倉庫などに再利用した。手頃な予算で購入でき簡単に再建できるものとして、元の大きさの３分の１程度のものが周辺山間部の傾斜地や農地の一画に建てられた。総桁行27.3m、梁間（奥行）7.28m、延べ面積約200㎡（60坪）の材料が２～３万円程度であったそうである。

その構造は日本の在来的手法と異なり、小屋梁が洋小屋組であるため、柱や屋根の下地となる母屋・垂木などは解体されたが、梁間を底辺とする三角形状のパーツ（底辺7.4m高さ2.1mの部品）は分解されずに現地まで運ばれた。建てるというよりも、組み立てる感覚であったろうと思われる。

わが国の伝統的な建物においては、柱や梁を組む場合に釘などの金物を使用しない。一方、バラッケなど洋小屋組の構造は、トラス等交差部などに帯鉄を多用し、釘やボルトなどで固定する。この工法は、学校の講堂など広い空間を必要とし、部屋の中に柱などがあれば邪魔になるという場合に最適であった。また、大きく太い材料を必要としないため材料確保が容易で、短期間にローコストで実現できるため、工場や倉庫、牧舎などの建築にいち早く取り入れられた。

この度、バラッケの移築に関わりを持つことになったのは、数年前にドイツ館館長の田村一郎氏から、大麻町にバラッケらしい牧舎や倉庫が見つかったので確認して欲しいとの依頼を受けたからである。収容所は全国に16ヶ所あったようであるが、その遺構が残るのはこの鳴門市だけである。仮設の建物の別称である「バラック」のドイツ語である「バラッケ」は、それまでの日本の建築様式から考えれば粗悪ともいえる材料が使用されており、それが長年転用や移築を重ねながらも、現存していたことは驚きであった。

依頼された時は６棟ほどとのことだったが、調査に行くとすでに１棟は解体されていた。館長と相談して、急きょ保存状態の良い２棟について登録有形文化財の申請をし、文化庁から指定の答申を頂いた。

まもなくそのうち１棟を鳴門市が譲り受け、「道の駅」として保存活用する運びとなった。復原工事にあたり、設計監理業務には、古建築等建造物調査研究会の代表として、㈲真建築都市研究室の中野真弘が担当することとなった。復原は、もとの様式どおりにするのが基本である。自然の脅威や長年の風雨に耐えてきた建物には、昔の人の知恵と工夫が詰まっており、現在の法律には適合しなくとも優れたものが多い。矛盾を感じながらも我々建築士は、建築基準法などの現行法規を順守せざるを得ない。今回も不本意ながら、もともとなかった筋違や土台を使用せざるを得なかったのが残念である。当然新しい材料に交換せざるを得ない箇所も多く、古い材料を残すことができたのは柱や垂木の一部と梁・母屋・端桁などである。

しかしこの建物は、洋小屋組という様式の技術を取り入れた建築史的建造物として、また戦時下の収容所という歴史的建造物としても貴重である。映画『バルトの楽園』にも描かれているように、収容所内とは思えないドイツ兵俘虜の自発的で文化的な活動と生活、地元の人々にもたらした新しい技術や文化、そして戦時下での国境を越えた温かい交流、それを可能にした松江豊寿所長の人間性などがからみ、民俗的にも非常に価値の高い文化遺産である。

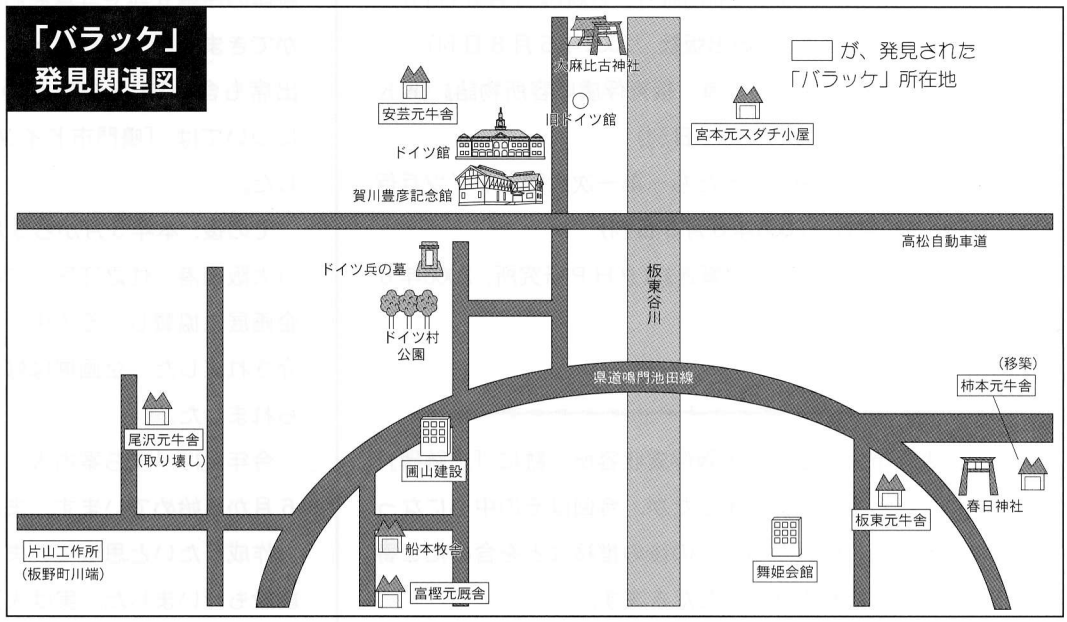
このたび関係各位のご努力によって、ドイツ館前広場に移築され、道の駅として再々出発することになったわけだが、中野とともにこの事業の一役を担えたことは、建築士として誇りであり嬉しくも思っている。これからも何かお役に立てればと願っている。

旧収容所の建物・文献資料などの「文化財」としての活用

「開駅式」での市長のあいさつにもありましたが、「バラッケ」の「物産館」としての活用を一つのきっかけに、当時の建物などを復原してはとの声が高まっています。もちろんメインは「登録有形文化財」の「船本牧舎」で、資料館などを兼ねての利用が考えられます。下層がレンガ作りですので移築はたいへんでしょうが、もっとも価値のある建物です。右図にまとめましたように、旧「バラッケ」もまだ数棟が残っています。これらをドイツ村公園の元の土台石の上に復原し、催しや合宿の場とするのも一つの道でしょう。

重要な建造物としてはドイツ兵の「慰霊碑」がありますが、こちらも「ドイツ橋」と並んで県などの指定を受けることをめざしています。

なおドイツ館所蔵の所内新聞『バラッケ』やプログラムなど文献資料の「文化財」指定も可能性があるようで、関係部局と検討中です。来年は板東俘虜収容所が開設して90年、一つの区切りとして100年をめざして多様な復原・再評価の流れを作っていきたいと思っています。



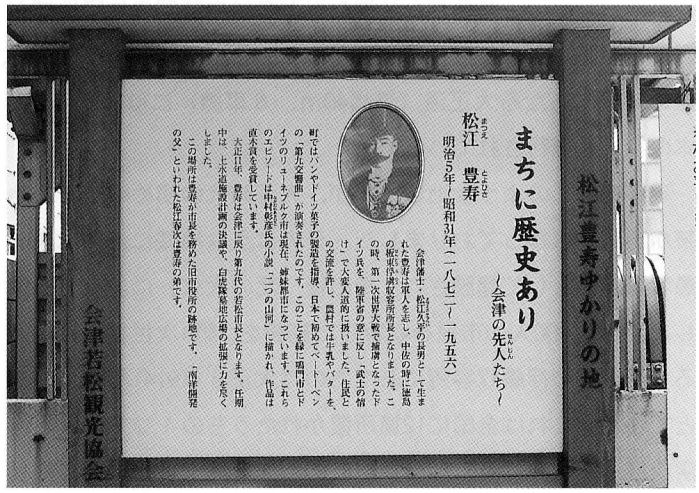
『バルトの楽園』封切・「松江ブーム」到来

待望の『バルトの楽園』が、６月17日に全国一斉に封切られました。最初の20日ほどで50万人と滑り出しは順調で、映画の評価もベスト５に入るなど良好のようです。映画の好評は「BANDOロケ村―歓喜の郷」にも反映し、開所した３月末から４か月たらずの７月11日現在で、来場者は８万８千人に達しています。県外者が75％も占めているのが注目され、映画封切り後はさらに増える傾向にあります。「ドイツ館」についても同様で、「ロケ村」と「賀川記念館」の３館共通券を売り出したこともあって、４月以降の入館者は昨年の86％増の１万６千人に達しています。

こうした流れの中で板東収容所を「模範収容所」にまで高めた松江豊寿所長への関心も急上昇で、徳島新聞が繰り返し特集を組んだり、関連する展示会や講演会などが相次ぐなど、ちょっとした「松江ブーム」を呈しています。

地元の徳島新聞は、１月末から12回にわたって「松江豊寿とその時代」という特集を組み、会津や東京での取材を含め多面的に松江の実像に迫りました。同紙はまた６月３日に「移動編集局『鳴門市』」の一環として、ドイツ館で『二つの山河』で直木賞を得た中村彰彦氏の講演会を開きました。中村氏は「板東俘虜収容所長　松江豊寿の知られざる側面」と題して、初代会津藩主保科正之と、江戸中期に教育を軸に改革に努めた家老田中玄宰の民を思いやる施策に、松江の「敗者への思いやり」の源泉を求める見方を示されました。

展示会としては、鳴門教育大学図書館が５月半ばから１か月にわたって、特別展：「敗者へのいたわり―松江豊寿と２つの俘虜収容所―」を開きました。ドイツ館では７月に、同館所蔵の多様な松江の写真などを中心に、特別企画展：「徳島・板東俘虜収容所長　松江豊寿の実相」を開催しました。



会津若松市旧市役所前の「松江豊寿」の銘板

このほか館長の田村は、５月末に会津からの招きで「鳴門市における松江豊寿」というセミナーを担当しました。講演の後葵高校の先生から、文化祭での「松江豊寿展」のアルバムをいただきました。丁寧に調べておられ感心しました。なお「徳島におけるドイツ2006」記念事業の一環として、８月26日に市立徳島城博物館で、フォーラム「ドイツ兵俘虜収容所長松江豊寿

の実像を求めて」（鳴門市ドイツ館史料研究会）が予定されています。

松江や板東収容所などに関連した著書の刊行も、相次いでいます。今回は紙面の制約もあり、新刊の書名のみの紹介にとどめます。11月末の次号では内容にもふれますので、意見や感想などをお寄せいただければ幸いです。

村上政彦『ハンスの林檎』（潮出版社、2006年５月８日刊）

古田求『バルトの楽園』（潮出版社、2006年５月８日刊）

星亮一『松江豊寿と会津武士道　板東俘虜収容所物語』（ＫＫベストセラーズ、2006年６月１日刊）

瀬戸武彦『青島から来た兵士たち－第一次大戦とドイツ兵俘虜の実像』（同学社、2006年６月９日刊）

秋月達郎『奇蹟の村の奇蹟の響き』（ＰＨＰ研究所、2006年６月19日刊）

前号で、大阪市大正区の「大阪俘虜収容所」跡に「史跡碑」が建てられたことをご紹介しましたが、今回はその中心になってこられました西村区長から、その後の推移などを含めたご寄稿がありました。掲載させていただきます。

大阪市大正区と「大阪俘虜収容所」

大正区長　西村　東一

大阪市大正区は大阪市の西部、臨海部に位置し人口73,000人、工業出荷額は市内８位の区であり、主に鉄鋼や流通関係を中心に、阪神工業地帯の中核的な地域です。また大正区は川と海とに囲まれた島状を呈し、区画整理事業によって都市基盤は整備され、沿岸部の工業地帯と公園などが多い内陸部の住宅地域がうまく調和した「まち」です。都心である「なんば」にも近く、区の背骨にあたる大正通（道幅40m、６車線）には、１日500本のバスも運行されています。

現在ではこのような地域ですが、大正時代の初め頃は新田地帯が縹渺（ひょうびょう）と広がっておりました。そのような地域に当初ペスト患者隔離所として建設され、その後「北の大火」によって罹災（りさい）した延べ22,000人の市民を収容した施設を、第1次世界大戦によるドイツ軍の俘虜収容所にあてたのは大正３(1914)年11月のことでした。これは全国に12箇所置かれたうちの１つで「大阪俘虜収容所」と呼ばれました。当時の新聞を見ますと異国に降り立つ兵士たちの中にはバイオリンを持った姿などの記述も見られます。収容人員は当初468人で、そのうち12月には206人が徳島収容所へ送られました。収容者累計は760人、演劇やサッカーなどが盛んで、収容所の詳細な記録や写真等が残っています。大正６(1916)年２月に収容所は閉鎖され、広島の似島へ移されました。

ところで、大正区では現在「歴史のまちづくり」を進めており、公園などへのパネル設置や区民70人の方々の参加を得た「大正区の歴史を語る」の発刊、大正区ガイドマップの作成、レンタサイクル事業などを手がけております。

その中で、区民から永らく忘れ去られていた「大阪俘虜収容所」が話題になり、鳴門市ドイツ館のご好意により様々な資料を得たうえで、本年２月18日に田村館長もご出席いただき、史跡碑の序幕式典や写真展および記念コンサートを開催することができました。当日はドイツ総領事館のティート総領事代行の出席も含め300人の方々の参加をいただきました。その様子については、「鳴門市ドイツ館館報第14号」でふれていただきました。

その後、本年３月から５月まで、大正区として「海の時空館」（大阪南港、住之江区）での「懐かしい大正区の風景」という企画展に協賛し、その中で「大阪俘虜収容所」は写真を含め紹介されました。企画展は好評を博し、マスコミ等でも取り上げられました。

今年度は「まち案内人」ボランティアの養成のための講座も６月から始めています。また、小学生低学年向け「大正区読本」も作成したいと思っています。さらに、「大正区第九合唱団」の創設も行いました。実は大正区の玄関口にあたる「大正橋」（区名の由来になった橋）には、欄干を五線譜に見立て「第九」のメロディーが刻まれ、歩道にはメトロノームの石標やピアノの鍵盤もデザインされています。このこともあり、地域からのドイツとの国際交流を一層進めるため、去る６月９日に合唱団の発足式を行いましたが、参加者は200人規模です。これから練習を積み、来年２月18日（収容所閉鎖記念日、史跡碑序幕式典の日）に私も一緒に大きな声で合唱します。今後ともドイツとの友好親善を進めるとともに、鳴門市の方々とも友誼（ゆうぎ）の関係を持たせていただきたいと思っています。

来年２月をめざし「第九」の練習に励む人々（徳島新聞提供）

５月初めに、賀川豊彦記念館などの一行がアウシュヴィッツなどへ行って来られました。その強烈な印象を同館長の田辺さんに投稿していただきました。写真は、２週間ほど前に同じく同地を訪ねた田村が撮ったものです。

二つの収容所 ―アウシュヴィッツとバンドー ―

田辺　健二

さる５月８日、鳴門市賀川豊彦記念館主催の「アウシュヴィッツ・ウイーン平和の旅」一行10名の一員として、アウシュヴィッツを訪ねた。

アウシュヴィッツは、ポーランドの古都クラクフの西方63キロにある町オシュフィエンチムのドイツ語の別称である。1939年９月ドイツ軍がポーランドに侵攻し、第２次世界大戦が始まり、ポーランドがドイツとソ連に分割されて以後の名称である。はじめはここにポーランド人の政治犯のための強制収容所が設置されたが、41年以後は近くに第２、第３の収容所（ビルケナウ、モノヴィッツ）も建設され、ユダヤ人の大量虐殺が行われた。その数110万人から150万人に及ぶという。ナチスドイツは全ヨーロッパのユダヤ人の絶滅を目指して、総数600万人余が各地で虐殺されている。ロマ民族（ジプシー）も同じような運命に遭っている。

„Arbeit macht frei（働けば自由になる）“ アウシュヴィッツ収容所の門の上にはドイツ語でそう記されている。しかし、この門を入って、生きて再び出ることのできた人は、ほんの一握りの人達にすぎない。美しいポーランドの田園風景を楽しんだ眼には、何ともおぞましい光景が待ち受けていた。

現在、アウシュヴィッツ、ビルケナウ両収容所跡は、国立博物館としてほぼ完璧に保存されている。ナチスドイツが撤収の際、爆破・焼却したものや戦後取り壊されたものもあるが、それらも含めて残された建物や施設、犠牲者の大量の遺品などが保存されている。世界遺産にも選定されて、世界各地から多くの人々が訪れている。人類史上最悪最低の収容所跡は人間の罪深さの象徴として残されている。

一方、わが板東俘虜収容所はどうであろうか。こちらは、全く対照的に、「奇跡の収容所」と言われ、『バルトの楽園』として映画にまでなった。人間の美しさの象徴として、その跡を保存すべきであろう。現在、ドイツ館や、映画のロケセットは存在しても、肝心の収容所がない。その跡地は、大木と雑草が茂り、自然に還ろうとしている。是非、市や県あるいは国の支援と復原をお願いしたい。

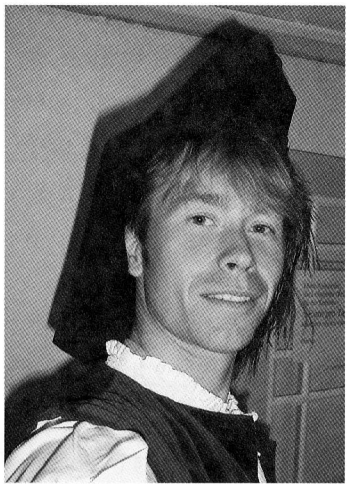
アウシュヴィッツ国立博物館正門

新旧国際交流員のあいさつ

これまで２年間、精力的に活躍してきました国際交流員のマティアス・ヒルシュフェルドさんが８月半ばでドイツに帰られます。後任にはパトリック・ワーグナーさんが来られ、マティアスに変わらない笑顔を振りまいてくれるものと思います。お二人にごあいさつをお願いしました。

「ごあいさつ ―感心・感動・感謝」

鳴門市国際交流員　Mattias Hirschfeld（マティアス・ヒルシュフェルド）



2004年11月の「ルーエ　第10号」に、「あいさつ」を書かせていただきました。今回の15号に、また「あいさつ」を書くことになりましたが、辞任の言葉です。鳴門に来てわずか２年の間でしたが、それによって、今は感心・感動・感謝でいっぱいです。

まず感心したのは、どれだけ鳴門とドイツとの交流が盛んで、大切にされているかということでした。来てすぐに皇太子様がドイツ館を訪問し、姉妹都市のリューネブルグからの使節団がすばらしい歓迎を受け、ドイチェス・フェストも大成功でした。私の個人的な印象ですが、ドイツ村公園が整備されていくにつれて、ドイツとの交流が広がっていくという気がします。国際交流員として経験したのは、市民の交流のほかに、学生の交流、障害者の交流、音楽・文化・芸術の交流、経済交流、また最近では徳島県とニーダーザクセン州の交流など、さまざまな交流が発展していることです。「日本におけるドイツ2005/2006」でも、ドイツ館が重要な役割を果たしたと思います。

撮影中はいろいろと大変でしたけど、『バルトの楽園』という映画ができて、感動的な作品になったと思います。しかし、映画を見るよりはやはり、ここ板東にしかない実際に当時のドイツ人俘虜とかかわりのあった人たちと話すのは感激です。当時作られ、高橋さんがお世話をしつづけている慰霊碑に参るたびに、戦争という不幸な出来事からこのすばらしい交流が生まれたことに感動しました。

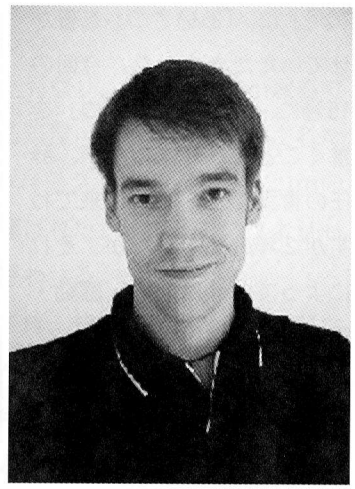
講演や講座、通訳や翻訳、計画作りや使節団随行、色々なかたちで鳴門市のドイツ人国際交流員として活動ができましたのは、皆様のおかげでした。市長をはじめ鳴門市の皆さま、館長をはじめドイツ館の皆さま、日独友好協会やコーラス９のメンバー、学校や教育施設の方々、メディアの関係者、たくさんの市民の方々・・・本当に感謝しています。少しでも鳴門とドイ

ツの交流に役立つことができたのでしたら、なによりです。今後とも交流がますます栄え、皆様の宝になりますように祈っています。そして次に来るワーグナーさんも、よろしくお願いします。

お世話になった人はあまりに多いので、一人ひとりにお礼を言うのは無理かもしれません。この場を借りて、お礼を述べさせていただきます。２年間お世話になりまして、ほんとうに„Herzlichen Dank!（こころより感謝）“ でした。

はじめまして

Patrik Wagner（パトリック・ワーグナー）



はじめまして。８月から鳴門市で働くことになった、パトリック・ワーグナーと申します。日本に出発する日が来るのを楽しみにしながら、準備をしているところです。

私は北ドイツのハンブルクに生まれ、ハンブルク大学で日本学を専攻しました。今年卒業したばかりです。日本には、2001年４月から2002年７月まで滞在したことがあります。最初の一年は大阪市立大学で交換留学生として勉強し、残りの約三ヶ月間は東京の日独協会で研修生として働きました。その際、日独関係について学ぶ貴重な機会が得られました。ドイツのラウ元大統領が来日した時には、歓迎会のお手伝いもしました。そういった重要な行事において、チームの一員として協力できたことを大変光栄に思っています。これから鳴門市でも、同じようにお手伝いすることができればと思っています。

これまで、四国を訪れる機会は一度もありませんでした。勤務先が鳴門市に決まってからは、鳴門市やリューネブルクとの提携関係についていろいろと読みました。30年以上も続いているすばらしい友好関係が、これからも続くことを願っています。そして私も、それに少しでも貢献できるよう一生懸命に頑張ります。観光では、鳴門市の有名な美しい渦潮を見るのを楽しみにしています。

鳴門市とリューネブルクの関係の更なる発展に努力するだけでなく、ハンブルクのことを鳴門市の方々に紹介したいとも思っています。ハンブルクはリューネブルクの隣町ですので、ハンブルクに行きたいと思えばいつでも簡単に行くことができます。ヴェネチアより橋が多く、ニューヨークより領事館が多いことで有名なハンブルクに、少しでも興味を持っていただければとても嬉しいです。

現在開催国のドイツはもちろん、世界中でW杯の雰囲気がまだまだ残っています。日本対ドイツという理想の決勝戦にはなりませんでしたが、次回に期待しましょう。

W杯の開催中、世界が国際化しているのを生き生きと実感できたのではないかと思います。鳴門市におきましては、今回のW杯の モットーでもあった „Die Welt zu Gast bei Freunden（ドイツで会おう世界の友達）“ を胸に、国際化のため、そしてまた日独の友好関係の更なる強化のため、一生懸命に努力したいと思っています。どうぞよろしくお願いします。

お詫びと訂正

編集責任者　館長　田村　一郎

前回の「第14号」で、板東収容所で朝晩吹かれていたラッパが寄贈されたことと、それにまつわる貴重な思い出を紹介させていただきました。その際誠に申し訳ないのですが、編集者の思い違いから寄贈者の「坂本筆子さん」と、口述筆記してくださった娘さんの「岡田光代さん」のお名前を取り違えてしまいました。お詫びし、訂正させていただきます。

今後の行事予定

８月６日(日)～26日(土)	『バルトの楽園』子どもの絵画展
13日(日)・14日(月)	ドイツビール・ワイン祭り
26日(土)	フォーラム「ドイツ兵俘虜収容所長松江豊寿の実像を求めて」（徳島城博物館にて）
９月２日(土)～24日(日)	ドイツ観光ポスター展
16日(土)・17日(日)	ドイツの木版画ワークショップ
10月７日(土)～29日(日)	リューネブルク・パレッテ会絵画展
15日(日)	第13回ドイチェス・フェスト in なると
11月３日(金)～12月24日(日)	ドイツのクリスマスマーケット・フェア
18日(土)～12月24日(日)	ドイツのクリスマスマーケット展

編集後記

前号では、坂本さん、岡田さんに大変失礼なミスをしてしまい恐縮しています。なお特別展「松江豊寿の実相」では、以前に松江家がご寄贈くださった写真を使わせていただきました。また写真の時期などにつきましても、ご親族の方々にご協力をお願いしました。厚くお礼を申し上げます。

『バルトの楽園』が封切られ、ドイツ館の入館者も増えています。国際交流員が交代するなど慌しい時期でもありましたが、これからも関係者やご来館の方々に喜んでいただけるよう、心していきたいと思っています。　田村